

こうして両方の表を比較してみると、業務内容調査からは、ベットサイド看護の少ない事がわかり、アンケートからは、ベットサイド看護の少ない不満が現われており、奇しくも一致する様な結果が浮かび上がった。

やはり私達の行っていた看護は、患者さんとの接触時間の少ないものであり、身のまわりの世話をしただけで「申し訳ない」と言わせた原因でもあった。そこで、此の資料をもとに看護業務をもう一辺考えてみた。

先づ第一に、看護婦の姿勢に問題があると思った。今迄は、診療介助の側に立って、患者を看護していたとしか思えない。第二に病気を持った一人の人間として患者をあかった事があるだろうか。患者のニーズに応じた看護を、基本的に打ち出し、少なくとも勤務時間の半分以上がベットサイドに移行する様に努力しようと話し合う。

その結果、私達はありきたりの言葉であるが、患者中心の看護に徹するべきだと言う結論を得た。そして、まず第一に、カードックスに依る看護計画の展開を実施することにした。これによって、看護の態勢は患者中心の看護に、やや移動した様に考えられるがもっと研究に努力し積み重ねていかなければならない。

最後に、此の様なアンケートを作成して、状態を知った事が、何よりの収穫であった。同時に尙一層の奮起をした。アンケートに御協力ありがとうございました。

耳鼻咽喉科

失声状態にある患者の コミュニケーションⅡ

発表者 二村 美代子

耳鼻咽喉科一岡

1. 事象の紹介

前回の研究で失声状態にあるPtとNsのコミュニケーションの関係はとかくNsからPtへの動きかけが強く、一方的になっているのではないかという疑問が持たれました。そこで私達は前回に引き続き、失声状態にあるPtとNsのコミュニケーションの関係を良くしてゆくにはいかにしたらよいか更に検討してみる事にしました。

2. 状況の確認(イメージを備える)

前回のテーマをとりあげて検討してきた結果失声Ptの為に看護の動きかけがだいぶ改善され計画されてきています。

a. オリエンテーション

- オリエンテーションは画一的なものより個別的なものに変わった。
- 失声P tについて客観的観察を基にN s間でカンファレンスを持っている。

カンファレンスの内容

性格・習慣・学歴・職業・年令的・性的・特徴・失声前P tとの面接の時期

- 上記資料を基に失声P tと受持N sで面接を持っている。失声前筆談文字板身体図使用など
実物を使ってのデモンストレーションは必要物品が確実に用意されているほど有効である。

B. 文字板使用

- 失声前P tと受持N sの面接により文字板が作成され内容が個別的に変わった。
- 文字板にくわえて身体図を作成した。
- 身体図作成によりチェスチャーが少なくなりP tの負担が軽減しN sも察知しやすい。
- 文字板の大きさ(B 4判)文字の大きさは適当である。
- ベットサイドに置いてある文字板を探し用いるまでに時間を要す。
- 文字の形態はひらがなが好まれる。
- 用紙は白地に黒のマジックペンを使用し夜間は用紙を黄地に変えてみた。
- 文字は縦書横書P tの希望によることにする。

C. 筆談

- P tは意志を長い文章で書きやすく、P tはその方が正確に伝わると考えている。
- N sは時間的制約の中でそれに応じられない場合があってイライラする。
- N sに余裕がない場合などP tの筆談を早のみこみしてしまいP tをいらたさせることがある。
- P tによっては筆談が充分活用できず訴えが少なくなる。(筆談が不得意な人)

D. チェスチャー

- P tもN sも単純な相互交渉の場合活用され易い。
- P tのチェスチャーについてのとりきめは個人差があり難しくあまり活用されなかった。

E. 看護心理劇の応用

- N sは発声できないといふ異常なP tの気持をある程度理解できる。
- 失声P tの問題把握に有効である。

3. 解決されなければならないことの発見

- 失声前P tと受持N sが面接しオリエンテーション、デモンストレーションの機会を術前何日位
にしたら望しいか検討する必要がある。
- 文字板の置き場所用紙の地について考える必要がある。

- P tは単純な具体的な看護行為を欲求する場合にデスチャーで示し易いので N sは P tのおよそのデスチャーの傾向を把握している必要がある。
- N sは時間的制約のない時に P tと余裕をもって話し合いを持つ必要がある。
- 看護心理劇の場面をかえて失声 P tの問題把握に努める必要がある。
- 会話と筆談の本質的な違いを理解する必要がある。
- N sはコミュニケーションについて学習する必要がある。

4. 3に関する情報の整理分析

- オリエンテーションを P tの心理的反応を観ながら何時行うのが有効であるか追求する。
 - 失声前早期に行った場合の障害
 - 失声前後期に行った場合の障害
- 文字板の置き場所用紙の地によっては今までより更に P tに手軽に活用される。
 - P tの示すデスチャーを家族より N sの方がすばやく察知する。
 - N sの専門性を高める。
 - 筆談は会話に比べ相当の時間を必要とする。
 - N sが失声 P tの持つ問題を把握することにより P tと N sの間に良い信頼関係が生れる。
 - N sがコミュニケーションについて学習することは看護の働きかけに科学性が存在する。

5. 問題解決への予測をたてる(仮説)

失声状態にある P tと N sのコミュニケーションは

- 1) P tと失声状態にある個人として理解することである。
- 2) コミュニケーションを容易にする信頼関係をつくることである。
- 3) P tの現在の状態(環境、状況)に適合するようにコミュニケーションを変えることである。

6. 予測したことへの対策をたてる

- 1) 現在施行している失声 P tのための面接、個別的オリエンテーション、カンファレンスを更にこれからも計画し内容を充実させる。
- 2) 失声 P tの為にコミュニケーション timeを計画する受持 N sがこれに当り看護計画に組み入れ、スケジュールを P tに知らせ両者で時間を決める。10分間以上のコミュニケーション timeをとり内容は P tのその時の状態によって異なる。
- 3) 今迄の経緯
 - (オリエンテーション、文字板、身体図、筆談、デスチャー、部屋の環境等)を知識と関連づけて考察する。学習会を1 W 1回計画する。
- 4) 看護心理劇を色々な場面を設定して行ない失声 P tの問題を把握する。

7. 実施

- 1) 面接をもって失声に対し P t の性格背景その時の状態により P t は様々な受けとめ方をしていることが解った。やはりオリエンテーションは個別的に行うべきものであることを感じた。カンファレンスは N s の文称 P t の客観的観察の資料提供の場として必要であった。
- 2) 失声前実物を使ってデモンストレーションすることは必要物品が確実に用意され容易に活用された。
- 3) コミュニケーション time を計画したのは今回が初の試みなので N s ははてれくささも手伝ってスムーズに展開出来ず考えているようなコミュニケーション time とならなかった。
- 4) コミュニケーション time の導入が悪かった為か P t には大した反応は観られなかったが感謝の意はあらわした。
- 5) 筆談の得意な P t はコミュニケーション time を特別計画しなくても一般 P t とさして変りないコミュニケーションが持てるように思われた。
- 6) 筆談の不得意な P t はヂェスチャーが多くなり、口唇を動かし易い、N s にヂェスチャーを読みとってもらい言葉で復誦してもらいたいと願う。女性の P t はこの傾向が強い。
- 7) コミュニケーション time は時間的余裕のある時に行なわれる為 P t、N s 相方ともに、いらいらすることもなく P t の筆談を N s が復誦しながら進められる。又内容が誤って解釈されることもなく P t は安心して検温時などより余計筆談を用いて満足した様子だった。
- 8) 筆談は P t にとっては会話であるから N s がその場にいなければとだえてしまう。例えば時間的制約のある場合など N s は P t に「後で読ませてもらいますから書いておいて下さい」と云ってその場を去ってしまう。P t は N s が測にいて見えて欲しいと思い N s が居なければ書く気にならない上記のような看護の働きかけは間違っていたことを看護心理劇を行って発見した。
- 9) 文字板、身体図、筆談用具の置き場所は P t、N s ともに解りやすく使用しやすい点で床頭、台におくことが適当である。

評価

- 失声状態にある患者の問題ととりくんでみて N s はとかく失声患者として受けとめていたが失声にある個人として看護の働きかけに務めなければならないことを痛感した。
- 筆談、文字板、身体図など物品使用にあたっては今迄の経験を通じ限界を感じている。
- この問題にとり組んでみて個別看護の重要性を痛感しこれからもそのような見方で P t と N s のコミュニケーションをより深めるよう勉強し努力したいと思います。